雜記 二

洞津藩
八幡町
剣倉

雑々記

一大ぶくろ乃人なと時ゝ男と見ぬかとにおひたてしく
ゝちゝりてし男を一口ちゝひてゝり
一西の四条より八北白河門より八西人をを酒ぬうき。
のゆゝくとしいぬ一町はゝり時ゝうきの利
上諸主西宮　まよひ神
瀬瀬体
一大ぶくろぴぴぴぴの身婚り毛ともをけ一婚とゝる
一今八むゝ一ぶよゝ北元浦ゝゝの仏にゝりくかとは
ゝりの仕一ゝぬ小一条大路ゝてゝり少ぬほとに祝上
人の手ほくゝゝ一をて物見ける為八ぬかと

宮内庁書陵部

小おいらにくハてて人ゝてまふふとおりひて
るをいくあつりかれハるゝひてたちぬ
ゝゝゝハちゝかゝかゝふこのゝくう一くもゝゝを
一ゝとゝかゝ川のつゝ　あをひきてゝ
一主様の北かゝ上出雲いつとちる雄比殿山ゝむ川ち
京坂乃中ま手比のゝかさ多ちまりゝかゝ大なる
魚ともおほゝゝ三尺をゝりの船
一ゝとゝ童のこゝちさまもたなしてゝゝゝ一なる人金ゝ
ゝゝ比役　給仕ゝ
一ゝ面つゝりのやゝにゝゝめきて
一なゝ先ゝゝれ

一ゝ人ゝほゝゝりて
一ゝゝつゝに
魚養ゝ出七大ゝ額　ゝゝこゝやの玉ゝ大なるこゝハゝ
一ゝはこゝれそく
一ゝゝを記女
。ほむゝ詞
ゝゝうちそほ姫りてつきくゝ明りゝゝ日喘感イロケテ日本紀
うゝゝハゝいとにくさゝけゝゝゝ
いゝゝとゝちゝきて
一ゝゝたくゝ戸
一人ゝの君ゝそ

一早ばやくふく
一ゑびすにまゐり
一紙のつゝみやき　十市皇女

○宇治拾遺一

一盗賊ヲ逢テ書をこゝろひとしたりし經を書り
にあるゝをこゝろを世の人孔子の子也といふ
一今をむかし在令の宗翰として侍従の子にいろにふ
りゝ法師なりけり和泉式ア にかよひけり經を
めてゝくよみあり
一ものひい法師水もひいゝ
一加ゝ松つゝを法師

一加仲流行ひとて說法ありひき人いまゝ
一高風はゝゝ形ゝて坊ゝに及ゝ
一ゑをてゝ人のめ結をくゝ
一むゝ手と坊るとゝ法師鬼搭屋をぬう
一何といふにのくゝきゝせゝゝをいひてゝ
鬼乃車を祈りいてゝ
一何ゝ無
一ゑゝこゝれゝ法師さゝ
一ゑゝゝとゝゝ
一何ゝ鬼の手もとゝきゝ
一ものはふくの物ゝ

一不動尊堂

一これを法隆寺よ

一ゑしまはしをしてあみだ佛ドて

一ゑてはすぢ

一ゑくひふて

一同じしやはんをめり

一ゑはこふ中にのこまふ金ハはるを

一源氏の通俗の指図をうたはは時素重みの

向くをの法ゑうゑなをやいをを見てうゑひ法ふ法

ゑいてはくはるをゑくいのなは前のあみ法とい

をれをはゑくしきくはは二条院かをはは法

ひてはは四京寺に満ゆりてはーふをの匂ひはむーは

かをを法はしくハつくうまのゑうてはーこをを

四をををはまもうくをを咲をうを和をを

物ハ見はさうゑを

ををを法りてはーををいひをを通俗のよろしく

よみみ和ををしは法りはるをハはをも

なきをはりををはは法事をををはをみ

ををのををハなをの名ふしはくをれををはを

りをはりをれはをををくなふをををはは有

ふふこのはハ大をこをのはりはをりはをを如ふを種

かくはは人の撰集をはをを法りをを和をを法を

なのはなしは、ある日の新聞に米大納言の
書きて出す人も学ひ給ふ山里をもつて宿
乃あるしとなりけり
とよみ給ふはじめてこれをとく世の人こゝろ
のりて門先をはらふ前に人もとひ給ふなり又宿
はなのうしなりけれとあるじを花とおもひ
給ふを稚子はおはしまなるにいつまで米大
納言のはじめてこの歌人をわらつるとかゝ給ふ乃
撰集うけ給はりてえらびをまふ給はしき
事をとひておにうちはらひ通後のりと
なりて歌人をうゝとおぬまとかゝう

八百石おうなをなぜて内ゝ給ふ
をれ給ふ
一両をうひをハなうてこうの物
一分をはらみ
一両このほう
一両をうのけてかをとなれをい
一両をものもれふくつをあうう
一両みしこれて
一両をれ句体なまぬしの物
一両けの一三人
一両ちちうちはおうこうてはる

一津乃國つゝせ人しゝ
一殿のゝ大袋はてゝ
いれをて大袋のたゝし米をて行仕しをゝ
格勤のゝ法ともゝ乃ゝひゝ法之
一殿様ゝのゝ法ねあゝみて宮の内ゝ
ぬきゝゝ法ゝゝ風をのこぬなめりと乃由
一河りゝとて笑山もるぬ
一引せ人しやゝ
一玉祇
一ゝと風しき印苟
一天ゝ人而のむ祢をぎりまきりてやまを病を話しゝは

一ゝゝくゝよ行つきぬ
一引れゝよまゝと殿りゝゝ河ゝゝあひゝゝ
一天殿ゝのゝま蒲ナラン
一門はきぬ法あひゝといふゝふゝのきて常してゝゝやか
にきゝふれけを記女ゝゝゝを
一引のゝゝと乃ゝゝはゝゝ人ゝりゝゝ
味噌けゝ
一門をゝゝ先のゝゝゝくゝゝゝもゝのゝゝゝゝゝまゝたゝの
八よゝてきぬなゝと革統ナラン法ゝゝゝにゝれてゝゝゝ
一引ゝゝぶゝゝゝをせん
声絶す

一西京ふなぎいとおほくおもひ合ふ所のうけ屋こう
して物いとほしがりなれずたゝかひて食おとに
○堂八清純〉
一白米十石をおもはしていらくとおきて
一ゑとゝ武まは
○糞ばり
一これをまゝうけてかゝんん人もう形
九れゝゝこ
一ゑをはらちりをてゝ
一世ばりハ和のねりひとゝをあにぬしてきをて
やゝにうさくゝとかりくゝありりゑを

一銅のゆゝきをおほくをて酒つりうりゑを以へ
仮ふとてまいりうりゆのりうはあゝまゝをひゝて
一ゑをゝくゝしうりゑほを袖をかゝひて口をきひ
のゝひかとゝくはやりれをきてドせハ
一ゑれハしけつり
一ふゝしきれ
一ゆのゝまひをはおゝとおかさハおいゝにとり
をゆひてをゆゝて
一ゑの忘ゝをしくいむやれハ金おをゝく
はゝくゝきゑ形しゝ
一ゆてをのゑ世ふゝ〈て仮京もあざみほめ行ひり

一むかし一院の尾平禅師内供といふ僧をみな真言
をよくおぼえひて年久しく行てそなふとなん
ひて世内供ハをれ出うの利益ハ寸はかり鼻の
れとなひより内うてをるこそ見ぐるしかりしに
小て大柱のごとくなりにつ内ふこうして抜たり
一日をうつくしてひとりとものかるぬ
一日ハ一日をひとりとものかるぬ
一家なるぬやこれなる人の法をれふもこそよぬき
一ひきをふす
一ふきにてなふかけるすハ武蔵ふうをの国礼
一国いちのうをれなとの河ふこうふ婦こうて面
とりなをとその法ねの先ちはけしきとりて
一面ともハしこなくいひなきは
一うふをきやりそうしは
○ふをせまハふをむる心之
一天ふをを女こそしてひををの国ふをこうをやとを
めくそれをををてけ法ともの河きうるめよやけしう
ハ河しといひてをれを法をうて
○橋季通
「設河芳国強力
一ををアをを」ともかこくうふせ者とのこ
一ぬす人の大将軍

一ねんもつてやうにありて
一ちそくはさもさんとものやなといひそうな
一菅原の天神
○延喜法師
一おなじなかくそそひの羽をきてゐ
一見くりもかくれかくれかもかくれかきてゐ
よこ結よせりけるこゝろ
一ちりぬるゆをたりけるにくにうはなやりにおほ(て)
川とえいくしに
一ゆくゝあゆこゝろありて
一ゆをゝ明り

一酒こうして
一えんちせんりふふうあのそう
一用いゝ度
一そはちをして
一ちはしのやうか
一そのこゝろぬこゝてまやうきてまはりてん
こゝさせひいつる
一うちはしのきこゝ人をとたをしまはん
一えさいくさいとりふをそ
一このあゝふきいとはこゝ
一良秀うよりうり不動

虎ていまりねくゝ物をうゝ者
面をとゝてゝ所やしなひ給
人をゝゝ命をつ海てくよむ歌と見てゝ
河きたゝかきハゝりかき世の中に
よきをゝゝきてわきいふ小を人
今ハむかしゝ月けのふとふとのゝひゝ
のほりくゝれゝゝゝひひに越前のゝとふ人
おりとゝ小紅をしゝ者りけゝ
にめてゝ記人命よみのれやれり書ハ伊勢のゝふ
ひゝきゝゝ河ア小河ゝゝ月けのゝふつきく
ホれほゆきハゝ世ゝ人にゝりうゝ給ゝを

風の吹きゝけゝ給ゝをてくゝ給ゝけくの
紅のひゝ人ゝ所ねきゝ所をゝ見所りこの人をめ小をは
やとりもゝれの山ゝれハゝその者のゝ人ゝハをかゝ
ゝひてゝひきけハ大ひゝこゝを人の紅ハ色てまつり
ゝ所とかゝりゝれハゝれゝゝひつきてゝ見ゝ
ぬすませよとゝふれりひゝけゝえせとゝひゝれ
ハゝハゝその人ゝとゝゝゝせよゝゝひゝゝハゝゝ
ハさもゝてゝ人ゝゝゝゝせてゝりゝていみーくゝゝ
ひてかゝ○石ゝゝゝゝせゝしてこゝひめゝゝをぬゝ
まをよとせめひゝれハゝゝゝ笑にやゝり者人ぬ
ゝまをせてゝりやゝてめのゝとうゝくゝひゝゝ

いとまいとまをこそ
もはしほとゝぎすのこゑ
心うしと打ながめいとふ
くうちわたとつまてる
いひやり行
同なひきや都のゝ花ハ
しの原につけしハ
返しあね
物さ返ひらちはゝ
はなちるとをかりふに
ゆ月をてゝはてはひさかのくゝはめて
ゝ
ゝ
ゝ

程の事に入て人も殺うけ悪をとんぢけて今
なりなんとする物をそらひらかなとに向むかひ
のみぢかけのちひさてゆるるものをはそてふとて
しは

一利せうえ

一伏見御殿なる大字治殿の御ものにくれたる御のまり
を達たほくおそしくふ小やうをつて機嫌と
いふ人のまにれしとて若人になして十又よて尾張
国にをはしてなりたるいにをはりふくてうて国おこ
なひなりおのの拠田神いちはやくたはしまして
たのなりくさをもぬのに百姓をむけ無礼を

いたるものをはやてをそらにをはしまして
ましまわは大字国の威勢国国ふも面さりて
くにのをもおもたちおそれたり事を
一同ふ大字国なる人々に国にたる面まて兄弟
ふもまいくぬを
一同やみたりひてをそ人ふをを所をよ所といふ大字国
ひうきるまにに清神ハたはしまちぬ下らう乃
是れをいたふをを所を所をにまて
小大字国をかくせををて清ら人をなくく
くふてきてをとらをを清をに面をこの仰らて
やしけるまにたぶをてハわ力におよハぬなりをの由を

八俗あり紀伊兼雄を手始よみて多小法樂せん
と世に百餘首のみなもり玉まき國のとなせ
をつとかりくは俗を頼俗しのひたりをん
ちむ川りしかりてその信を迎たりひてきたま
小は僧のくをんをわこしくたしは玉のをふちり
てこの谷をせんとてう酒を紀くいま玉司と成く
りれ方をよ紀たのをん生紀信を俊温といひしふ
は國司を信綱といふちりとりあはわをせのり別
一夏を雀のしのりきけるに
一今八むりし去門前司といひし人紀女
一言辻より北宮所より小ふ一言辻わりてふ宮をん

ほとハ小家も形くてその場ひとりをるくと
くてありける
一物ひとりくをうなあくのをんをてうつて
見をハ白米のいろりなをうたをこ
一世ふのくに米紀ちりをを紀之
一言みまけく
一のかくね茶まこをけてををををは
。雀乃くをり
一屋や
一村のれを形ちてハ
一別ちををハうはしをくをんをは由ちをちをつま

なくてハしかたなきぬほどふいろいろ
ゆ一しんもうせはて
あみをはらふまはこほりをの一けそんやうに
ひやうにてのうち先てこれをかきりなし
あいだ人をよひてその人ハひまのうちを
ていう人をひとりてこれをもれて見せよ
あよくほけくしくゆひハ
今ハむかし一條摂政と八条の摂政とまた
一やんこそなくおれ人の姫君ハたをはして
めにうち先ハと母をもかうひてなりはら
せたを給ぬほどに中国ハけいみーくいろそて

母をせてあはまりしきをとりくゆくゆくまひけ
きこはたる事ハ一とのうひてまうしたりの
なうきてそ一とはたるのうひとうれハ
地蔵こそと言くこの家ハ前ハいふなまは
八しきはかハいそはけとそ年ををくをと
こんうきき年はの冥
とくはしりれハなをそはきハそはてハ
みそこそ形うをとをひてかをしたのしける
あはまはをはうふ人ハあらぬ所ハ用う
をたく人のふ坂ハ実
とおみうををくをうをはけんう一ゆ

宮ゐ
一ゐ
一ゐ
一

されはさてのちはまれぬことなり

同西へ行うの海へ

同はしのくれなゐて

同うきおれるを

同世は久の宮梨はいとくさきをかくるを事のあるにかゝふ

くるをまゝ心を西にうけ人をなん心はしをそけ

はゝ人はなほ正きうのたとをむいひけり

同の榜嚴院を住りひとつに極楽を祈ふ仏住世界

西をゝしるにはたゝき大小後西ふむうの合を

せなうにおもひ西路すり山へのかはとをはは

さてゝの神む

同の暦をきてさてとひとりはたきはいはは

しくかみをとけをすかん日とをかきてうら

うやゝ来はまに成八武八物とをぬ日暮をかな

同まゝのる日はこれをうはとかきたきはいふとは

おりてもはこれをのゝめとて念しくるを

同市暦をこれにゝむとゝ

同暦を筋よ立ゝこれゝ海りなうう

同海のとにあをはせはをて海りて板中のゝき

大つかをゝ世なとし

同ひをつゝまきう

同奥口同音にあめきて

三月やゝとゝと笑ゝ
三月一のほとゝふはゝひとゝふとのゝかとゝたかゝ
三月をくゝとのほりぬ
三月をろとゝてゝりて
三月幣帛ゝうちまゝの米ほとのゝとゝ
三月やひゝをきゝゝ
三月人のあをきゝうゝ
三月をきゝをゆて人ゝゝ
三月國の后宴に見ゝをきゝふやゝうゝたきゝゝゝうゝを見ゝかの
三月オのをハるをにゝゝゝ角をろゝ
三月のたゝゝ神ゝかゝゝゝにきりゝけの伝ゝを

三月わゝ方ゝ仏の林に行ゝねゝもゝゝゝゝゝを
ぬゝゝゝ方ゝ行の船
とかゝゝ方ゝを見ゝゝ行をわゝりとゝ見ゝこゝとこゝその
船ゝかゝゝめ見ゝ方ゝまゝに大きゝふはゝゝおゝて国ゝふ
ゝて方ゝ女人ゝ風ゝこゝろひぬひふやりをゝハゝかゝろ
ひのたゝゝ方ゝ示をは見ゝをゝゝゝつけをゝてゝゝこの
とゝをいふをゝにかけまゝくもかゝゝこゝゝる所ゝゝゝも
まゝゝをゝこゝゝゝの年月こゝろまゝたゝゝゝゝ見さゝね
なゝ所ゝ女ゝゝたゝゝとゝふゝをきゝゝゝ
橋ゝ方ゝ方ゝ家ゝ行ゝあゝゝ船ゝゝゝ
ゝ物ゝもおゝゝゝゝゝゝゝゝめゝふ

一今はむかしと家中納言といふ人の所ゝ家奏
臣の御子形りさかしくてとりこしらへる山世乃
るみなをり給てうこてろは一かしきくきとゆとく
おしうたてたてなんたりし給ふ笠の中をなき
ハめく姫ぶ給ひ給ふ也をかく大ぶ姫とりてなん
たはしく給姫とり給ひ世ありせあてくしきて
紀くやひ給ふ
一雨をうう大きにたりしる屋の治をに大きな給ふ形雨
をくれとうゆるけしうハ所ぬほとかう一
一三月廿
五しの面のおきてにひろうう形るかをりしう

はうたして世はうををうう
一親をこのこうう人をしう給ふ所人なき
一引うをを一といふ物をを一をを拾うまをうう
一天柱をこれのとハをを人をとそこれいとうう
ハ紙みうのふ紙につ
一面まどひをしく
一雨ををこうるや
一布うもう
一雨ぬれハとり給ををふおなて
一元をいをぬるう紙これを千貫うけなとはいふにやの
うを人をを給をを

一ゆきぬはうり小ゆひ〳〵うれと
一をれてくる人をそのゆ
一ゆ〳〵これをうりてゞやや
一ゆのあなたくるやうに結つゝて
一又西宮殿の大答小聖殿ハ皆若にたゝせよと
有ゆれハそ〳〵
一そのりまちゝわすとハなくて立てうりてゝ
面白くゆれ小聖宮殿ハわきすりゆはりくおハ
ゝり中略に大なる木言きれ一ゆ角てうりそゆ
れを見てみる人数のかゝたらはゝ〳〵とのゝ見
ゆいひゆれハその大答のゆ日ハむ身のゝ時とる

前の花いみ〳〵くたり〳〵入つくりて松ゆ精ゆりひま
ゆくゝけゝゝれゝゆゆ時ゆりゝぬゝのハゝゆゆ中略ゆ
きハそのゝりゝゝ面のそゝゆゝにいみ〳〵くめてゝう
おゝ〳〵う見遊
一ゆいゝみゝゝ時ゆい

馬

一今ハむゝし信濃國ゝ住師ゆり生ゝゝ田全ゝて住ゆ
にゆりゝ小ゆれハ中ゝ実戒もせていゝて京ゝのゆりゝ
東大寺といふ所にゝ実戒せんと思ひてとかゝして
のゆりゝ受戒〳〵ゝゝ
ゝてゝゝにゝいさゆゝゆ厨子仏をわこ時ひいてゝう

黒川門そをおはすしなり
一ゆくゆくそこにゆきくとゆらく
一河内國なこの聖乃おこもる山の中を死ゆきぬく
角田住吉と申すまうを合いなとりふ人やのりを
一ゆくそひといふものをなつ〳〵ふと似る時と地ゆを
ゆつくとこゑにつよけふし主なをとりてきて利
一神小のりてきて引し荷を死ゆくとそいひなり
一舌なめたりをしく
一わうちふもゆて十日はりゆうをもこの人のこころ
先たちにゆけ行てみの日医なきそと笑ゆく云く
一きやうよう

答歌

一涙の面しなくとゆりく
一ゆりひかりてみよこ先を聚て住れハ
一ものハむきゆうに見てゆうなよけき
一ま一の物まうけてを居ゆう
腦ゆり
一夢ふとひしそゆう人仏地〳〵て
一れせゆうなの
一ものしぬはきて
一神乃神の冠も形きやゆうなを物を多ゆうきゆを

をくゝ仕者ーをゝ人講師ーゝとゝ仏ゝ
の佛と名をつけをゝ所ゝ
一所ゝをゝゝけてゝゝ一をゝ
一今ハむかし大隅ちかゝ人玉の政をーたゝ元れとな
ひ行のひゝ郡司のーとゝけかうけきは故郷
ていまーめんと云ゝ云ゝ　ゝをとをまゝけてゝ
ゝ紀人まーけゝゝきに人婦ゝりゝりてゝ
をゝゝをみれハ黒髪ハ黒髪もまーゝいと白く年
をたりゝんゝにおせんとゝいゝをーくお泣ゝれハ何
ゝに泣けてゝゝれをゆるゝゝ人をゝりふにゝすゝく
事ゝーゝゝまゝゝをかゝゝーゝりゝふに泣を

ひゝゝ者にゝゝゝ者ゝいゝふーてゝれをゆゝゝ人
とゝひてれのれいみーゝぬを人ゝれゝゝよゝて人
やゝいゝはいゝくゝゝゝとゝ者よゝみゝゝ人とゝゝれ
ハゝハゝハゝてゝつまゝといをれてゝゝもゝくゝ
ゝ者にゝゝゝゝゝて

ゝをゝをくゝかゝゝのゆきハつゝをゝゝも
ゝ是ゝゝゝをゝハひゝ一にゝゝ
とゝひゝれいみーゝゝゝをゝゝゝ米ーゝゆゝ
ゝゝ人ゝいゝふゝゝゝゝきハゝを一ー
一美作玉中さんゝゝやゝゝゝ神れゝーまゝゝゝ
ゝゝゝ中さんハ結ゝゝゝゝゝゝゝゝ

一月ありこちらへ

月をのつとことしてこ

一月をつかる伝

一月ふかつる式のことをしるしるむけうふおほつく

一月の内のみうしなりすりられハ

一月ハなをぬりふかやうにあ式しろこて

一月のせあてまうりられハ書強の君をを殿上の君

ハけてこうひふかみうときこしをの内りてし

をのこともおこれをかくこうふらんなるかり

ちのみをやてせいをまとて為をはけらんをと

わなせこれてまあやうけさひなみ殿上人く

きこ殿ををくこれこうふすはずいひの内りを

けくいひの内ふやうかけふかめは今すりかくこ記話

をりかくきこやしてはちの内をけねの君をよひたと

ものをは酒をを物なをこ五おこせこの内ひせん云

一月ふかくらこけこうしらををこく

一月あをちのさこふこくを式をりて

一月ををりこ額をの内川

一月何をの人ををおいををあ

一月をこしこ引をけどこんを

一月ゆうじだやとおりてをを

一月んの内ひけしの内式なる山ゆをのきゆ

所にはばかりと入さるれの入るを見て上人はての武者ら
ゐきとてわらべらゐるはらかるれの乞ほしをこい入く
法師はなはだ紙冠をきて板をはなをみはけて
ゐらゐるを矢ゐるゐるはらを神笑なり乞利

荒見川

立蛙

見ら人ら船の先なる蛙
河をあつく

ゐらねしてゐ

河くし

極楽ら　堀川大臣大下乞通乞業

今乞むかしかて鄙をいみしく無をさを殺ひける
みとのひとら紀をよ酒せら生けるふ人くらく
よみら少ら木こら高き堂の
見ら朱ら多くくとて山ら乞いくひ
ちらき人ちとらくやゐ
あ船わかけなはこらをないひを
ゐらひらきこら侍
一母の尼しら初をはをとと苦ちいひはをてら
ゐさゐれら家方ゐから法白家ハらちらくてを
法をはちらを
一かひとしくくら紀ちいをみく

一ちこのさてゝ何とかしてや
一河ゝ入むこうの河すとゝのうらいみうこのけ
ゆうほうゝ新をんゝ
あるてりや生のさや庭ゝ火のつゝみてこ人金
ゝも入ゝゝゝゝゝ有ゝ
河ゝ人のやゝいよ河人とて宮六はゝ角ゝうみてう
ゝゆうゝ
一そのさゝに
當ゝ矢乃ゝ
一今ゝむゝ河米ゝ有ゝ
小西河ゝすゝ小西池ゝゆうすゝ小東ゝゝ野人金ゝ

大ゝ池の河ゝゆうゝ殺ゝ当のゝゝ
河芙の上下ゝゆうゝゆうのゝゝ乃ゝゝゝ
ゆうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ住ゝぬゝ野ゝゝゝ
ゝゝゝ芙ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

河内國田原

河きゝゝ河てゝゝ生付今にゝてゝ河つゆゝゝゝ水め
ゝゝゝゝ藥師ゝ

「ちゝ紀世妙毒況怪窩蒔と同じ人市原山茶
八景を名付くる名を拙命をよめる
手月磧（テラツキ）

「実松をれもゝのよ所やをうむら人毒を
ふ結ふ名拙月彩
杉茶松（クヌギノ）（マツ）

「空の雲をそをしやをのこ入に一あきハけ
山ゝの拙拙松ゝ拙
巖牆水（イハガキミヅ）

「ゝ紀や水のをゝ孔の毒ゝあて世の河利
ちゆよ頃はてゝき

北肉峯（キタシノミネ）

何をや向背うちつる人人も家を心のそひ
ぬ山乃ち形の南

流石渓

谷水やみ川の中のふく形うつる人心乃むな
しなかしぬ山乃ちうつる

洗密科（シノツノホ）

白うみうきいうかてしてかう形うつる量みう

一字落記

こうつ形ハ神ちしらーを

枕流洞（ミツノフラホラ）

うきうねの枕なう洞

水のみとり山乃ちうハ

長谷寺

飛鳥潭（アスカノフチ）

名説

ぜうこうもいのにいつ所こうう心乃ちの紀ち和ほし
洞くれうれ世とのよ世に世やとい所ハ世ハ白ちひて
和ち山乃家よ生れ形ハ紀人こうま和ほ人ハ世ハ白ちう居京白
丈山明といふ話人を彼山荘ち和ふて世ぜうこうお
して話を作りしめうう所お世川ちう紀ち也

○曽丹ち集に世ぜうぬ白とて所ち只和のうこう乃ちての白
ぜうと葉を次の白山乃ち和ぬ白ち世ぜいち

。れんし集ハ書ケ出ちょうちのあのあのはしくく
ちうちうといふの利書を順のとハかてをきすり未
ハうしもちうふ所ふの形り
。玉葉集ハ書ケ出ちうあのせうあるうあ所乃集
にちすし角くうあとて載うあ
。出雲風土記小海松より都ハ物をしるをる中に蒔頭
蒔頭のりを蒔頭蒔高ハ三月元日まハ長きる六寸とい
ふり。和名集に蒔蒔とかきて樹を記といふあ芋ゆり
。別業ちうはきとよあるこれ也蒔当ると蒔当るた
ゆりうあし松ハし。高天記小佐世の木榊といふり。高事
記ち佐志美の木といふハ和名に鳥草樹とうける木ハて

山里のとなりにゆとゆとりあんこれをきハ佐世の木といこれを
いふなり
。同風土記云大神大穴持命御子阿遲須伎高日子命御
髭八握千生晝夜哭坐之辞不通尓時祖命御子乘船
而率巡八十島宇良加志給鞆猶不止哭之
。同国にいとゆきをきうらうとうふハけ宇良加志とハ
うにゆをとうとうふにや前本紀小橋ゆ字前つうと
とよありううかとうふ所ちうれ形ゆにや
。松ハし風土記ハ朝ゆとハのうハその葉海をうりてとこ
夜ちゆりうと九月の比黄ちゆ葉のまりうるやしたら
花ゆく物をうを国はとふこれ前ち記小高名志高ゆメ

耶之
宗とのつかさ
「ふかのひきはーのみーつくちにたりとあひのはのく
れはしーは秋いつるをに人くさとしさいうてをいを歌
とて世の中をろろん人といふをきてしくかとおほ
し記人まさ姫ーなるるものまゆのはちをあるろふ
ぬいくとをるにしをれうくりくりくさにをこみをく
お秋かこ人りとにをいを人といはまるるる人くを
ふいとれりふやうおはるやはるう歌之
世あ所のをといを八古ふにやゐ樓元にもはえはち
をはるるるよぬひてをはのはをてしろう歌るをき

をあるいをひをなんりとるゆはみとのり
「ーやきのやうるはるをきをれと
源氏にりーのっといつはまおるり九藩ヒのるにや
歌るもねやみてをん人まうてぬはと八猫のいるれなと
いひをれこと歌り
「基善蔵八由くをを赤の人はをあにをををるはふ
を木をは、うを、さまひ生
「をるまま八かくれりはーはをもかるれをよ
おるはきハをれのををてをきふくいやーれをの名之
かさうれつをりてをは風の吹るはるに扉ををた
てを風にあるるぬやうにをはる

同やそしらぬてそしりまひてめとはそしらぬ精進を
のうなり
同潔よてうとそしらぬうなりとりおやまつをとは延
喜式小長谷山口神社のうそのまつをハ法てしみて
始のうせくるとをいひあるつなりや
哥ちまつ　なはんとてちとくもいとあをふるなる
ちむ哥をりうしなる哥の那
哥ちちハ信を哥をかをいふ哥ちの初末なりのハ
初哥をとを是をぬをハをとをいはををををを
しあふをいを哥をりうを源氏ものをいをを
哥はりうしうをくてさ式ふをいはをお那し

初ほをこの神おををけや那をりけんち
なりしるををひをふるは
わをはをいのはを神をや
哥りををやをけの　をのやををのをきはく新
をうをは如殺をををを

又

同　おをををををを見をいみををををこの
むハををのこをををををめり
はこををその心をををを
同かくてをこりに那りぬをを人をこの也をりけふ
も見をををたをくてはをぬはハををををいのひ

そらまなかにやまとのくにをかりあるとあり
りのうたのこゝろはこれ神代のたゞをたこゝろ
ゝとのたまふとかゝるにや
月はいりてのちのひつゝの時をうたふ
はまぢてうたくほしいとかしこいまてなく
うたくほしいは梅のはなまそかれうなくうぐひす
つくもがみとときこゝろ迷れいやてあふれなきを
ふるとうたふものとりおてうひをうるほと
にうりこゝとてきうぬ之
うふくうたいは鶯袋ふくりとくりとは鶯の名うの鶯
いとも袋ふくりを起をなるはり

わうこゝとうたをれ物をてむひねれいむけふ
とんしはくにうりとうんけん
おまとものとはまうこゝとのをれ所にそとて
はとものとはまうこゝとをいとんう
こゝとにこゝを
梅乃こゝいとけふありこゝ所をたうはうなく
てうこゝうこゝやしはをぬおきれをうり
耳にたりうこゝをきくはこゝうこゝうのもの
をうこゝふにはこゝれは耳をやしあふとはりこゝ
うのうさこゝにもうんこゝふ人ふ所をいねうせてうまに
ひやいこゝんさをふとこゝうをふたりをこゝてはり

時りを見わいてこしほをえてう
ちほきてをえてうとを初
十五日ありひのり太夫のけこしたのをもことをかひ
きてけこきてをきけハやうくこひをもたてゆを
うまや野をいふをゝ我ゝ由
なひハ僧坊とくく死さるもやうをいつう
よろこひハの一しゆ
ゝろひハ宇の字をよほろとゝむとれ程の身生一
ひさるすりも世のいふをは祢をみをしのはと
ふゝたにのゝぬをゝ
いつゝをのけゝこハ野とうたゝこけ戸けよは

しはゝこをよけをとるすおこをひてつうは
しこうハめけゝしけあゝほゝほとをのむゝをゝそ
姫にれりあゝけをおとけひのゝしはをゝあゝと
時重信子上人の家子
山ゝハけ師けをくくて居こうたゝこけゝ
をゝををふくにくをゝ
ゝををふくくとハをゝやをいふにや
ゝをむる物をハをしゝ子合坂の関おゝゝめ
おゝ祢ゝをほつる

又

祢りひやはあふはゝ山のせをゝおねハ少ゝも袖

そそろえつるぬぬ
右二首琴の名所琴の名所
琴ひき所とてかくいひつるとの詞ハ
こしめ[illegible]とくいみしくいたくいくらんとも
ふるさとのあきみんとおもひしとのもきさはさ
みくさたちくさ（双六名）
くのひとてて女うちぬ
極仙家ものがたりをうけねたくをうとのら
八代くのひ法略語之当もいふ事
所ら山おほくのとをこにらいのは
ふるしの杉をあ[illegible]

歌科日記ふもいかりあり[illegible]の杉と
いつ[illegible]この山とを杉[illegible]門といふ[illegible]帳ふ[illegible]
の法命といつの法法命より[illegible]の杉といふ
とをよみて杉あ[illegible]
摘ゑにら
[illegible]の杉もまうひて杜神山
[illegible]人
[illegible]
[illegible]
栗田壁[illegible]
[illegible]
[illegible]納[illegible]

爲上もおりゝ法をめしにいと称らけ給りの
大浦形といそれぬき八世の中をいとう海しけふくゝ
況糸のつゝきいとりの川を成くいもゝ法るの
なと給ゝ法らん
祢ちけゝるとも大浦川といそれぬき仕といつれ
の大浦をいつ法ゝ仕
可ゝとも祢ふりのひまふとのゝりけるをきけ
ゝ法なく形りぬるゝの所のゝ八まゝ海ゝ赤川人名法さ
てちゝくゝれいきゝうせぬりとほゝてハゝ海川り
いつまの國とゝみゝゝくの法ゝとゝ法ん法ふ形るなと
ゝゝくゝかゝ法を法ゝ人ゝ仕ゝゝ海ゝうゝ形

しうおほゝてかくゝゝいはゝ
河りゝゝにお所にゝゝも尺人名ふゝ仕て者る
きうせよみゝゝくゝのゝ尺
といふをせうゝなゝ法ゝ人きゝてゝれもなくく
河川ゝゝうゝゝのみきくゝゝゝくの法
うゝまにゝ人を尺人
みゝゝくの時范衛ゝ万第貴十六に尺ゝゝ
河ゝきゝ所とゝほゝしきゝ法ゝすゝきゝりゝ仕ほの
ゝゝあゝゝゝゝゝゝまゝ川いゝゝ多り
河形やゝゝゝ法物のゝゝ色
河ゝねゝゝの爲紀なゝ法ゝゝ法ゝゝをゝゝ仕ゝし

「それハ今の世も始まる谷へうけをあけて無
いく事ゆり出谷にくのるもあいハたらわさし
て物こゝろをいつはりやや
「ものゆ人ゝ始りおとと
延喜式ゆ斎院の式に御振十人といつり
「と人八ゆをれと形くゝ高ゝ有ちをしうるき海くれか
ゆしゝ日を見るやゝして社ゝやハれはしゝ月を金
さくかこにまゝして形ゝもしゝうゝ
「鳥羽の大皇
○右続日記
「文徳ゆ記に詞つゝ山美濃ふいつり原見紀ゆりそゝの
山かぶ
「言葉といふ所にゝまりたる松といつり
「津の浦ゆ
「松原といふ浦ゆ舟にのりこゝ
和泉ゆ今もいふ所ゆ主佐日記小津のゝ海
里を近ふ松原めもをく形ゆ海をと松ゆ
やれぬ妹もうむ所の浦なきし松松ゝ
「小津の名「大津ふむゝ付ゝ所ゆ今ハ少え
「海といふ所ゆりゝこゝや
○和名集云 日根郡呼啞乎こゝ
○日本紀才三日五月丙午朔癸酉軍至茅渟 山城水門

亦名山井水門茅停此云智怒時五瀬命矢瘡痛甚乃撫剱而雄詰之曰慨哉大丈夫云〻時人因号其處曰雄水門

遊仙窟云行至二三里回頭看数人猶立旨處余時漸〻去遠声沈影滅顧瞻不見

。土佐日記をかくてこゝに記れまにく海のほとりにとまる人も壹く彼りぬ舟の人も見こそ別りぬ哀ふもいふ事のこゝ一舟にもたりふ事あれとうしかし

。大和物語をこゝにおくいぬまとえ返しをせしく

うら海の舟のゆくをみこゝろ人の車をみ見ぬ〻れてをしけしはとはく

あはまにこゝ海ぬとちいはく赤ゝ海ゝ見れしを

ふ小ゝをの形しうら海を

。土佐日記ふ海のりとあはかみしも童まて酔しまて一

りをこゝにこゝぬ物しを足八十りし小諸をこゝ海

こゝとい海ふ集に狂衫細馬春車ゐ十字津ゐ一字

ゐ小ゝの詞を見ひてこゝけるにや

。お形しりゐふ

今見こゝを分をも知ぬ海のえの松すゝ

きに家を居をけり

。首冊集ヲ

新こゝも年八百ぬをなら仏のそれ

すゝはきをいく代経ぬゝ人

[illegible]
おれしは花をかりとるかはかぬかるるをもとをひて
のほきてをいてり
[illegible]
ひきのかはかり

[illegible]
[illegible]の花はさかぬをとて[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]相右[illegible]
[illegible]
[illegible]十三に[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

いまゝ見なれし
四ゝもを見てまゝは左ゑ中将の日記をいとめて
きゝつかなてゝ法ゆかりなりゝ
伊勢物語ありとを日記といふ記別てをゝ法を
文殊り記にも左五中将集といふ今三十六人金仙
の中に業平集とて法ハ法をつき物にあゝに
ゆかりやきえんせとのゝてゝ涼しなる風を
きゝは人も河ゝ法つき支ゝなをかしもいひそめ
は今ゝとゝゝふやとハゝしとて色を結ふ法ひといふ
わゝうゝとゝにやゝはまゝしゝまゝいまゝこゝ法
ゆゝ中務あゝゝ形ゝ

ゝまゝゝゝゝゝ法ゆかりゝ
四ゝしをてゝといふ
四詞書にふゝ形生と物をゝけゝハ事れゝゝや
四ゝゝたやといふ
れや者ゝ世ゝゝ人ゝを親とゝ法をい
ゝ俗をゝおやといふ
物河ゝハ形賀記にゝ紀川のゝゝ法をゝのゝこのやう
にゝけゝハをゝ見ひやりてをゝ法ゝ屋
四に法ゝ見をゝひりゝ法ゝ法ゝかきゝ法めゝゝゝみ
きゝゝ法ゝゝあまの法屋を法ゝ如
四人を尼をゝ法屋ひ形四ゝ法ゝ詞

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

めの石にハ女との石にハ法一ゆれといふてうその石を
河ゑといふ石ハ松あり石ハあり石ハふや
をとうひをを形ちてらゝ如
ひをゝもめ形ふゝつゝをれゝ
あはまを勿体おきぬ一ゝのれ
内ゆの一三尺といふて
学ハ魚也れほ形魚の中にさけとうきりて
二尺三尺とハいの形ハ有ゑいふにゝのゝん
ゝゝうゝうちハおおうはけてゆゝ
津の国ゑゝせんを
河内ハ龍泉ゝとて河ゝれとつの玉にゝ関ゝ

あ一こゝとて関山もゝ
河一こハ内一ゝ形ゝり
ゝはきぬの河をとゝふをのきて常一てゝゝやかよ
きゝあけなる女ゝも学い一利

六帖

たゝ山ゝ雲ゝりかゝ宗形ゝ形をゝ書ゝ
ゝ一すゝ形ゝ山ゝ雲ゝ
ゝはおを沙石集に和泉式ゝ物語一ゝ所に附面
のゝけゝにせんゝれゝて河をとゝふ物をかゝてき
ゝ所ゝにゝハの文をてきゝ所をゝれハ法河
ゝゝ所ゝけゝ河六帖ゝ河をハゝ

鯛のあるまき紀といふなり
和名に苞苴を河まきとあり日本紀ふ河に
とよめり今の世つとといふ物
こはこうもせたといふ
声絶もせたるうり棲衣をかけてひきといふ
こをけうといふにてあり
四の戸紀をはたしとおほさかおひしうにてうる
まひてをのうてをいふ
又海上のをおほくあるを物見海おそる海
ほうにはいうまてはこまかにをひて
言をうるのふるひてをちぬといふ

何方物かうりかやや姫おのをけ海人くに仙
の猫の猫これをを海くをのをとい高尉
おいくうにのをのうにをめををとをはをま
りぬをいひてうんにをかうりぬといふこを
をを合せをふにおいをうふと心をはを俗ふをを
うといふにをうをを三向にをいををかをひて関由
をせりをほりをうてをといふ
苑のをのをををはをくはをを云ふ
まをけてはをを心をを
日本紀を混の言ををまををとををり
をのいみをををいむやはいのをもみ

クスシハ
薬師ニヤ
医ヲ信ず
ハ不淨リトア
ヲ以テ可考
カク物忌トア
ハ心得カタシ
ヒイミシ
スシく
此二句既
注古今顕注尚
考合

ものをいひしを
をしくもあるかな人物をいひしを
音今にとゝまりのこるたにを野ひぬるかとよめは
あの歌注ふもしは詞のこり
ものをいはしをものいはしといてり
ものをいはしはほむる言也
ものを人のたゝ将軍といてり
ものをいはしものをいはしものをいはし

「和泉ハ」ふるもむかしにて「公ちゃ」といふこゝろなるや
「入道」の「ちゃ」ともいつり
「れ」ゝ方ハ井の林ありねもちう社式
ぬまゝゝ「ちゃ」の邪
こゝ「宿」名といふものこゝろなれのほころ出
「ちゃ」を取先くのおとりてぬを「時」の女ゝ「ちゃ」
「蔦」堤主子の国家にくゝ「ちゃ」はかくゝおもてり
「ちゃ」一とゝ「ちゃ」ゝ「ちゃ」角一ゝ「ちゃ」ふきゝ「ちゃ」きてり
「堂」に「ちゃ」一とゝ「ちゃ」よし角を「ちゃ」を「ちゃ」ゝ「ちゃ」と「ちゃ」ふ小昔
「ちゃ」ゝ「ちゃ」ゝ也「ちゃ」ゝ「ちゃ」通し「ちゃ」ゝ「ちゃ」角「ちゃ」ゝ「ちゃ」
「ちゃ」の角の「ちゃ」おせてたひゝ「ちゃ」ゝ「ちゃ」ゝ「ちゃ」ゝ「ちゃ」角「ちゃ」

「和せて」ハ世「ちゃ」ゝ「ちゃ」ゝ「ちゃ」角「ちゃ」ゝ「ちゃ」ゝや
「国」氏に世「ちゃ」ゝ「ちゃ」の出「ちゃ」をおゝ「ちゃ」ゝ「ちゃ」おもゝ「ちゃ」ゝ「ちゃ」といつり
「ちゃ」れてゝ「ちゃ」ゝ「ちゃ」人「ちゃ」ゝ「ちゃ」ゝ「ちゃ」ゝ「ちゃ」ゝ「ちゃ」といつり
「ちゃ」ゝ「ちゃ」ゝ「ちゃ」ゝ「ちゃ」ゝ

「その向うふかく淵の矢をいかるかことし」
「西の四条より八北堂和門より八西へ一町はうなかば」
「うきなり」
「うき宮紀土ふくひもちうこの角ひろ方の」
「うきにはひうなおひうなかば芦なとはるこれなり」
「かまくれ」
「すゝくまにはうはてぬほうをいつり」
「古なめはうをしくとい角うり」
「上おとをもはは天井のうち板乃辛にとこ海の河ア」
「あたまりなかに大なるうを魚をもはほうといつり」
「天はうはなまりもの物ふすうみア」

「まりはりはやうにはめきてといつりのこやまの」
「はほうなかなは是はうとといつ利」
「乃兼に河ひとおのはなは珠形り」
「書をふうこひうはの鏡をしきうにふうをの」
「そこをを世の人ゐるをもはれをといふ形り」
「はを宇治拾遺物がうりのはて宮荘子盗跖篇を」
「引てかけうはりの惡の山にをしのふきと」
「いふもゐるの惡の山をの角ふうにをはって孔子」
「はの角はれのこうこうふうとふうふ」

新古拾遺集に
彩うた

よみ人しらず

「やそしまの水とも見えしかはらく
すえ山の秋の松乃月
山家集石集に播後綱家にて所の人のあるを
ゝし見てうう」

新勅撰千大納言師氏
白雲と峯の紫千重くゝ絶ぬ松のあらし
ひゝらに吹くゝ松むしし

新古今に
下もゝ小松の山清き人澤に沒ぬき雲
紅葉を怨しなゝ

又

「雲ゝよみし面影もゝ紅葉しもこそれ
沒ぬうゝ清き雲ゝ
右二首八拾五
加をめよ野松りひ清き人ゝ山にもゝ
おゝれて八ゝゆるなゝ面

回

「雲ゝよ見しにも沒ぬうゝ清き雲
をあしもゝ沒ぬうゝ
山二首ふゝくゝまわ沒ぬ
「見ゝり沒をゝ人張ゝ八月とゝねゝ月
なゝ雲ゝ紅葉お沒のおゝ

はゝ京極殿の侍所に樓を
めしりかゝ[illegible]
自のはてをゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]

○十五年夏四月丙寅宴庭酒酣　上乃歌曰
〔気〕左乃阿沙気奈呼登以非都留登々擬須伴
万毛奈可奴加化登能綺久陪久
○十六年冬十月癸亥曲宴酒酣　皇帝哥曰
〔已〕乃已呂乃志臭礼乃阿米尓菊乃波奈知利曽
之奴倍岐阿多良蘓乃香乎
○大同二年九月乙巳幸神前苑琴哥聞奏四位已上共
挿菊花于冠皇太弟頌歌曰
〔美〕那比度能曽可尓米豆留布智婆賀麻岐
美能於保母能多乎利太流祁布
上和之曰

〔袁〕理以度能已々呂能麻丹直布知波賀麻宇倍
伊呂布賀久尓保比多利介理
○大同三年九月戊戌幸神前苑有勅令從五位下平郡
朝臣賀是麻呂作和哥曰
伊賀尓布久賀是尓阿礼波賀（可）於保志万能乎波
奈能須惠乎布岐乎須（淵）比太留
皇帝歎悅即授從五位上
○延暦廿二年三月庚辰遣唐大使葛野麻呂副使石川道
益賜錢宴設之事一依漢法酒酣上喚葛野麻呂於御床
下賜酒　天皇哥曰
〔許〕能佐気波於保迩波安良須多比良可尓何信

理伎未勢止伊婆比多添佐気
葛野麻呂涕涙如雨侍宴群臣無不添涕
○弘仁四年夏四月癸未朔甲辰皇太弟南池命文人
賦詩右大臣藤原朝臣園人上哥曰
○祈布乃比乃伊介能保度尓保止度伎須多比良波
知与止那久波企々都庭
天皇和曰
保度止伎須那久已惠企介波宇多奴志度々毛
尓千世尓度和礼母企々多理
大臣舞踏
右九首の中に略脱を生ずるなるべし乃
佐の佐上句のごとく乃葉の古風ずりハそこしゝ形
小河ゆるゝ可き事ハ古風形り男之の新撰
和歌集序に弘仁ゝ延喜に至りて之の歌を取て
そ和ゝ歌あなゝの古貴なるを八ゝ人の多き
おはりかな——
○續日本紀卷十九に如祥三年二月小無福ちの元
俗みゝの四葉にみちゝ行ふを賀し年ハ長寿を
我年てはく夫和哥之體比無為先感動人情最
在茲矣季世陵遲斯尊已墜今至僧中頗存古語
可謂禮失則求之野故採而載之「以下の略」
ゝて行ふ事にゝく知る色——